46
唯一人
台風一過
快晴の
野面にありて
草引く媼

47
梅の実に
かすかに朱の
彩兆し
梅雨酣と
なりにけるかも

48
人並みに
病と苦労
乗り越えて
今日佇めり
古希の花野に

49
木枯の
夜を南下する
わが船は
舳先オリオン
艦には北斗

50
木犀の
香に憧れて
風清き
秋の一日を
彷徨ひ暮らす

51
黒き犬
真白き犬と
戯れり
春の陽の下
若草の園

52
何処からか
テネシーワルツ
流れきて
過ぎし日のこと
想い出づる夜

53
その昔
学びの庭に
集いしが
歳経り果てて
四方に散りぬる

54
かの夏に
剣澤なる
雪渓に
我が失せし鍵
如何になりけむ

55
我が生は
宇宙の雫
一滴の
悠久は母
無窮は父よ

56
南風
矢車菊を
揺すり往き
父への想い
溢れ出でけり

57
遥々と
遠く旅来ぬ
北の涯
岬に立ちて
想うあの人

58
秋の野に
種々の花
咲き乱れ
虫も集きて
心華やぐ

59
秋霖に
菊は蕾みて
やがて射す
白き光を
待ち焦がれおり

60
秋草は
咲き乱れども
故郷は
人去り逝きて
淋しさ募る

61
雲海を
突き抜け昇る
ロケットは
健気直向き
胸熱くなる

62
満天の
星背空に
溶けるごと
数多の悩み
消えてあらまし

63
後髪
引かれ断ち切り
旅の空
離るふるさと
揺籠なりき

64
外国の
母の嘆きが
何故に
我の胸をば
しのに打ちおる

65
木枯に
背中押されて
冬の航
舳先に昂
艫には北斗

66
柿一つ
梢に残り
秋景を
点睛し居る
山峡の村

67
梅雨明けの
朝陽輝く
稲田には
数多の浮塵子
死して浮べり

68
往く秋の
旅の終わりの
停車場に
野菊一本
風に揺れおり

69
小春には
澄みし光を
掌に
遊ばせながら
還る遠き日

70
人の眼は
張子の虎と
心得て
雨風のごと
受け止めゆかむ

71
赤き恥
青き恥とも
かき尽くし
今宵見上ぐる
花の梢か

72
脂汗
冷汗　寝汗
かき続く
我は英雄
三汗王か

73
沢瀉の
謐かな白さ
稲のもと
静かに夏は
闕けゆきにけり

74
偶然と
世の人の謂ふ
必然を
辿り来りて
はや古希の春

75
故郷の
夕暮時に
さもにたり
旅の途上の
春の黄昏

76 友垣よ
命の奇跡
生きてゆけ
感謝の言葉
口ずさみつつ

77 故郷の
渚にありし
潮騒を
ふと懐しむ
師走の雑踏

78 柊の
幽けき香り
吹き攫う
木枯厭し
霜降の街

79 遥遥と
八潮路越えて
鰻の子
春を運び来
故郷の河

80 春浅き
伊豆の浜辺の
潮騒に
高らかに告ぐ
我が想い人

81 永遠を
君の海図の
経線に
無窮緯線
いざ旅立たん

82 明眸も
皓歯も花の
顔も
移ひゆけど
光る心根

83 三日月の
端に腰かけ
見下ろせる
故郷地球
青く霞めり

84 完結を
望めば心
萎れなむ
未完に向ひ
舵を切るべし

85 ひ弱なる
小鴨なれども
大海を
渡りて来たり
故郷の河

86 省みて
未来は過去の
集積と
我合点せり
樗散り敷く

87 彩は
菊から蔦に
移ろひぬ
束の間なりや
輝くいのち

88 掌に
楓一枚
載せ置きて
見詰めしおれば
秋は溢れり

89 柊の
幽けき香り
流れ来て
夕星灯る
樗の梢

90 日溜りに
一点の黒
よく見れば
微動だにせぬ
冬蜜蜂よ